

紀北家畜保健衛生所

電話 073-462-0500

紀南家畜保健衛生所

電話 0739-47-0974

紀南家畜保健衛生所 東牟婁支所

電話 0735-58-1481

暑くなる前に始めたい暑熱対策

もうすぐ夏がやってきます！畜舎の暑熱対策は万全ですか？

家畜はヒトよりもずっと暑さに弱いといわれています。牛にとっての快適な温度域は、おおよそ成牛（搾乳牛）で10～20℃、去勢肥育牛で10～15℃、育成牛で4～20℃です。意外と低いですね。

牛が暑熱ストレスを受けると採食量や乳量の低下、発情の微弱化や受胎率の低下といった症状を呈し、生産性が下がります。経済的な損失にならないように、牛の暑熱対策について見直しましょう。

① 畜舎対策

遮光

すだれ、寒冷紗などを設置して直射日光を防ぎましょう。畜舎周囲に緑を植えたりグリーンカーテンを作って西日を遮るのもおすすめです。また、白色塗料や石灰で屋根を白く塗ると、太陽光が反射して牛舎の温度が下がります。屋根への散水も天井からの放射熱を減らすために有効です。

換気、送風

換気扇や扇風機などで舎内の湿った空気を外へ押し出しましょう。ヒトと同様に、湿度が上がると牛の体感温度は上がります。

牛舎内に風速1 m/秒の風が吹けば牛の体感温度は約6度下がるといわれ、風速2 m以上の風は、吸血害虫の被害も抑えるといわれています。さらに、牛で最も発汗量の多い部位である首～肩付近に風が流れるよう風向を調整してあげると、牛の体熱放散が促進されます。

冷水

乳牛は気温が高くなると1頭当り一日100～120Lもの水を飲みます。水のパイプラインやウォーターカップが直射日光にさらされていると、牛が水を飲もうとしても出てくるのが熱湯だったりして上手に飲めません。暑熱対策の一環として水にも気を配り、新鮮な冷水を十分に与えましょう。

② 栄養対策

採食すれば熱が発生するのは当然であり、牛が暑い夏に採食量を落として体温を上げないようにするのは、生命を維持するための自然な反応といえます。

搾乳牛において採食量の低下がはじまる気温は初産牛で 23℃、経産牛では 21℃といわれています。

繊維源の確保

粗飼料の食べ込みが落ちないように、高消化性の良質な飼料を給与しましょう。イネ科乾草などは長いままではなく、短く切断すると咀嚼（そしゃく）に要するエネルギー量を減らすことができます。また、飼料給与を日中の暑い時間帯ではなく、気温の低い夜間に行うのも一つの方法です。

エネルギー補給

濃厚飼料の割合を高めてエネルギーを確保したいところですが、タンパク質は代謝される際と排泄される際に熱量が多く発生するため、注意が必要です。そこで、アシドーシスのリスクが少なく、飼料の栄養価を高める方法として、油脂の添加があります。第一胃で分解されない油脂（バイパス油脂）は熱量増加が少ないため、活用されています。

第一胃内で悪影響のない糖源物質の活用も期待されています。例えば、グリセリンの給与は第一胃での熱産生を抑えることができるため、暑熱ストレスの軽減に効果的だといわれています。

第一胃機能改善剤、強肝剤

第一胃の発酵が悪いと、よけいに発酵熱が出てしまい、おなかの中から猛暑に見舞われます。第一胃機能改善剤、生菌剤、強肝剤などで体内器官の調子を整えましょう。

これらの暑熱対策は、暑くなる前に始める方が効果は高いといわれています。暑熱対策としてはその他にも様々な方法がありますが、いずれも単独では決定的な効果を示すことはありません。牛の状態をよく観察し、複数の方法を上手に組み合わせることが大切です。

気になる点や不明な点がありましたら
所轄の家畜保健衛生所にご相談ください。

